

よみがえれ! 海岸林

Vol.9

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、
元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えします。



廃墟になったサイクルスポーツセンター（左下）の屋上から。海岸林は跡形もなかった（2011年10月30日）

2011（平成23）年9月22日、日を同じくして二つのプレスリリースが出た。

一つはオイスカの「海岸

再生プロジェクト10ヵ年計画」開始。このころまでに、10年間に寄付10億円を集め、宮城県名取市の海岸100haにクロマツの苗木を植えるプロジェクトのかたちがあらかじめ固まっていた。地元の協力、行政との折衝、そして寄付をしてくれる支援者探しという

「三方面作戦」にもめどがついていた。

ただ、記者発表の文言はいまいで、「名取市」という具体的な場所にも規模にも触れていない。この時点で、各地の海岸林再生について、国や自治体の方針はまだ定まっていない。プロジェクトはあくまで「自治体などで策定される復興計画と調整を図りながら」進め、先走った印象を与えないというオイスカの考えが反映された文面だった。

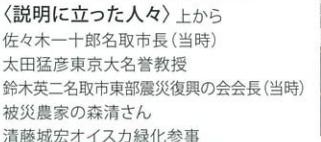
そんななかで強調したのが「被災地住民の雇用を伴う種苗生産」である。被災農家をクロマツの苗木を育てるプロとして

もう一つのプレスリリースが、全日本空輸（ANA）が出した「ボーイング787が仙台の空へ」。新たに導入するB787を震災復興に役立てるため、10月30日（日）に宮城県内の小学生ら260人を仙台空港発着の遊覧飛行に招待するという計画の発表である。

リリースにはあわせて、成田と仙台を往復する同じ飛行機を使つたオイスカのプロジェクトの視察ツアーも発表されていた。ANAは発表の日取りをオイスカに合わせることで、プロジェクト支援の意味もこめたのだという。話はしばらくさかのぼる。

雇用し、苗畑や資機材の確保にも協力することで、各地で必ず不足するだろう苗木の供給と、被災者の収入確保を目指すことを詳しくうたつた。すでに記したように、宮城県の既存の種苗業者が新規参入に理解を示し、県もゴーサインを出したので、こうした記述ができたのだ。

「カラの飛行機を使えませんか」



〈説明に立った人々〉上から
佐々木一十郎名取市長（当時）
太田猛彦東京大名誉教授
鈴木英二名取市東部震災復興の会会長（当時）
被災農家の森清さん
清藤城宏オイスカ緑化参事

が即答して実現したのが、視察なのである。

オイスカは160席分の参加者を集めた。無料で最新鋭旅客機に乗れることがあって、企業や行政、内外のメディアなど人々は苦もなく集まった。参加者は現地で4台のバスに分乗して別々に海辺を回り、ポイントポイントで説明を受けた。裏話になるが、道もロックになり被災した海岸部を大型バス4台が鉢合わせしくりに、担当者は旅客機の仙台到着寸前まで苦闘した。

ツアーハはさまざまな弾みをプロジェクトにもたらした。説明役は家や田畠を失った地元の人々や研究者らが務め、私もこのときははじめて名取市を訪れ、4階建てのサイクリングセンターを統括する立場に就く佐々木廣一さんである。

7月にオイスカが東京で開いたシンポジウムを受けて、8月8日、当時ANAのCSR推進部にいた魚田夏紀さんがオイスカ本部を一人で訪ねてきた。ANAも多くの企業と同様、「特色ある震災復興支援のかたち」を模索していたのである。

「仙台空港と周辺の人たちの暮らしを守るためにも知恵を貸してほしい」という魚田さんは、オイスカの現海岸林担当部長、吉田俊通さんは「素人が簡単に考えてもらつては困る」とむしろ突き放した。「きれいごとを言われるより信頼できる」と好感を持った魚田さんはしばらくして、「成田と仙台を往復するカラのB787がある、これを使つて何かできないか」と持ちかける。「できるに決まってるじゃないですか」と吉田さん

プロジェクトを追い続けるインバケットになつたのが、この光景なのである。参加したANAの松井收CSR推進部長（当時）は「メロン農家の壊滅的な被害が印象に残つた。あつて当然だつたものがなくなることの影響の大きさと、それを元に戻す必要性を痛感した」と語つたと。現場を見ること、見せることの大切さをそれぞれが心に刻んだ。

吉田さんは40席分を地方の職員も含めたオイスカの内部に割り当てた。「本来なら外部の人を招くのが筋ですが、組織内に残つていたプロジェクトに対する冷めた眼を全部消し飛ばしてやろうと思つた。このツアーで雰囲気はまったく変わつた。それができた点でもツアーはラッキーでした」。

いま、そう振り返るのである。ツアーハの説明役の一人に加わつたのが、のちにプロジェクトを統括する立場に就く佐々木廣一さんである。



名取市沿岸部で視察予定などの説明を聞く参加者。写真奥の鈴木英二さんの旧居は、震災の記憶をとどめるため今も残されている



視察ツアー参加者がB787に乗り込む（成田空港）

技術者と経営者の顔を持つ

1950（昭和25）年生まれのこの人とオイスカの出会いはこの年の5月、それにはすでに触れた（2015）。間に入ったのは、当時宮城中央森林組合に勤め、別のプロジェクトでオイスカと付き合いがあった弟の佐々木勝義さんだつた。

よみがえれ！海岸林



佐々木廣一さん

廣一さんは42年勤めた林野庁を3月に60歳で定年退職。5月は就職活動中で、7月からは林野庁仙台森林管理署で臨時職員として若手の指導に当たっていた。そんな廣一さんはプロジェクトの現場の責任者になつてもらおうと、オイスカは手を尽くした。夏休みをプロジェクトの現場の責任者になつてもらおうと、オ

クトでオイスカと付き合いがあつた弟の佐々木勝義さんだつた。

廣一さんは25歳からぼ10年にわたって岩手県内の3ヵ所で担当区主任をつとめた。1992年に森林官と名が変わったこの仕事について、本人に説明してもらおう。

担当区主任は国有林5千haを管轄して、何から何まで一人でやる。調査して木を伐って売り払つて、その後にはまた植え付けをして、造林をしてという仕事をすべて計画、管理する。作業は自分が地元の集落の人々を雇つたり森林組合に発注したりして進める。だから、出稼ぎに行くか行かないかとか、

高校を卒業した1969（昭和44）年に林野庁に入った廣一さんは、25歳からぼ10年にわたって岩手県内の3ヵ所で担当区主任をつとめた。1992年に森林官と名が変わったこの仕事について、本人に説明してもらおう。

廣一さんは、25歳からぼ10年にわたって岩手県内の3ヵ所で担当区主任をつとめた。1992年に森林官と名が変わったこの仕事について、本人に説明してもらおう。

みには吉田さんが家族連れで廣一さんの自宅に泊まつたりました。結局、仙台森林管理署の仕事を年内いっぱいで辞め、福島県の山林除染の指揮官、高校（宮城県立小牛田農林）の先輩が経営する会社の役員などほかの誘いもあつたが、オイスカの仕事を引き受けた。最大の理由は、若いころの経験だったという。

廣一さんは、25歳からぼ10年にわたって岩手県内の3ヵ所で担当区主任をつとめた。1992年に森林官と名が変わったこの仕事について、本人に説明してもらおう。

集落の人々の生活に直接影響を与えることもある。春の山

入祭などのときは、村長たちと並んで一番上座に並ぶ。20代の人間にとつてすごい世界です。当時は公務員の倫理に関する規定がそれほど厳格で

なく、羽目を外しておかしくなるやつもいる。ちゃんと山に行つて現場を見ていないと、

作業職員などから、「オラさの主任は山来ないから、ちょっとくらい手抜きしても」と思われたりする。そうなつたらしつかりした山の管理ができるなくなる。失敗の責任もかぶらなくてはならない——。

わかれたりする。そうなつたら

しっかりと山の管理ができるなくなる。失敗の責任もかぶらなくてはならない——。



宮城中央森林組合（当時）の佐々木勝義さん（中央）を励ますツアー参加者



ミックス
責任ある木質資源を使用した紙

FSC C016564

☆次回は2020年3月号に名取市海岸林再生の会について書く予定です。



〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
(03)3322-5161 (03)3324-7111
E-mail:kaiganrin@oisca.org

■海岸林再生プロジェクトホームページ
<http://www.oisca.org/kaiganrin/>

ブログは毎日更新中！

オスカ 海岸林

検索

プロジェクトへのご支援・ご協力お願いします！

- 郵便局から（お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください）
口座記号・番号……00100-6-482316
加入者名……海岸林再生募金
- 銀行から（お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください）
銀行名……三菱UFJ銀行 永福町支店（支店番号347）
口座……普通 0054080
名義……公益財団法人才スカ（コウエキサイダンホウジンオスカ）



〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
(03)3322-5161 (03)3324-7111
E-mail:kaiganrin@oisca.org

■海岸林再生プロジェクトホームページ
<http://www.oisca.org/kaiganrin/>

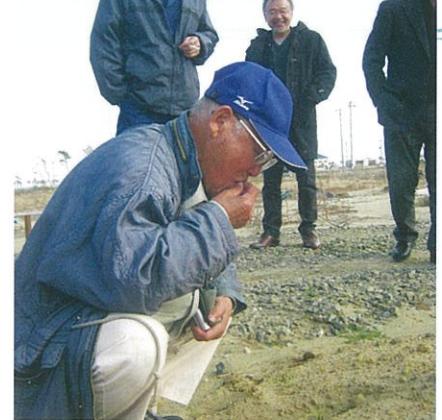
ブログは毎日更新中！

オスカ 海岸林

検索



宮城中央森林組合（当時）の佐々木勝義さん（中央）を励ますツアー参加者



苗畠用地のチェック。太田清成宮城県農林種苗農業協同組合長（当時）は土を口に含んで質を確かめた。左後ろが佐々木廣一さん（2011年11月27日）

苗畠用地のチェック。太田清成宮城県農林種苗農業協同組合長（当時）は土を口に含んで質を確かめた。左後ろが佐々木廣一さん（2011年11月27日）

くちやいけないけど、佐々木さん、どういうのがいいかな」「これならみんな分かるんじやないか」で肩書きは「名取事業統括」に決まった。

2011年の秋からは苗畠の場所を決める作業などにもかかわった。こだわったのが現場事務所である。オイスカは、仙台駅近くのオイスカ宮城県支部を当面プロジェクトの事務所にも使う計画だった。「現場は常に見ていなきやだめ。地元の人を雇用するものだから、雨宿りや暖を取るための場所も必要だ」と廣一さんは異を唱えた。2012年最初に上京すると、吉田さんとともに前田建設工業を訪ねた。「建設会社だから、現場事務所の必要性を分かつてくれ、中古プレハブの寄付をしてもらうことになりました」

事務所は、家が流れたり場やボランティアの着替え・休憩場所としても重宝することになった。

前田建設は苗畠の防風ネットづくりにもボランティアで携わった。「雪の後の泥んこの中、いつもはきれいな格好の事務職の女性まで働いてくれたんですね」と廣一さんは今も感謝の念を隠さない。

「俺は仕事請負人だから、請け負つたら結果をきちんと出す。オイスカのイメージをアップし、国にも県にも市民

のしきたりや文化は当然違う。「待遇もはつきり言わず、嘱託採用という話はあつたが、文書による委嘱の伝達もなかつた」「オイスカのことは全然知らなかつた。いろいろ調べたが、労務管理から現場技術指導などを含めた事業運営に関する精通する人が少ないと感じた」と廣一さんは冗談めかして辛つただが、震災の年夏から秋にかけて、現場を管理できる人材を探すオイスカの側は必死だった。

採用は2012年1月1日付。採用前は「植え付けや施肥、下刈りなどの造林を指導してほしい」という話だったが、正式採用後に苗木の生産の指導もするよう頼まれた。辞令などなく、「名刺つくらな

くちやいけないけど、佐々木さん、どういうのがいいかな」「これならみんな分かるんじやないか」で肩書きは「名取事業統括」に決まった。

2011年の秋からは苗畠の場所を決める作業などにもかかわった。こだわったのが現場事務所である。オイスカは、仙台駅近くのオイスカ宮城県支部を当面プロジェクトの事務所にも使う計画だった。「現場は常に見ていなきやだめ。地元の人を雇用するものだから、雨宿りや暖を取るための場所も必要だ」と廣一さんは異を唱えた。2012年最初に上京すると、吉田さんとともに前田建設工業を訪ねた。「建設会社だから、現場事務所の必要性を分かつてくれ、中古プレハブの寄付をしてもらうことになりました」

事務所は、家が流れたり場やボランティアの着替え・休憩場所としても重宝することになった。

前田建設は苗畠の防風ネットづくりにもボランティアで携わった。「雪の後の泥んこの中、いつもはきれいな格好の事務職の女性まで働いてくれたんですね」と廣一さんは今も感謝の念を隠さない。

「俺は仕事請負人だから、請け負つたら結果をきちんと出す。オイスカのイメージをアップし、国にも県にも市民

の風情がある。この人が扇の要に就くことで、プロジェクトの性格は決定づけられるこ